にて知べし、また、爾雅（註疏本三卷廿丁左）釋親に、男子謂二女子先生一爲レ姉、後生爲レ妹云々、とありて、妹は男子の妹にいふなるを倭名抄（二卷十四丁オ）兄弟類部に、爾雅云、女子先生爲レ姉、音止、女兄、和名阿禰、日本紀讀與レ兄同云々、また、爾雅云、女子後生爲レ妹、音昧、和名伊毛宇止、日本紀私記云、以呂止云々と記されしは、上の男子の二字に心づかずして、誤られたる也、喪葬令集解にも、姉妹俗云二阿禰於伊毛一と見ゆ、

〔古事記傳二十八〕熱田緣起に云、○中略先レ是日本武尊於二甲斐坂折宮一有二戀宮酢媛一、即歌曰、阿由知何多（アユチガタ）、比加彌阿禰古波（ヒガミアネコハ）、和例許牟止（ワレコムトト）、止許佐留良牟也（トコサルラムヤ）、阿波禮阿禰古乎（アハレアネコヲ）、（中略）比加彌阿禰古とは、宮酢媛を指して詔ふなり、氷上なる姉子と云意なり、曾丹集歌に、あれこが閨と云り、今世の言にも、若き女を姉と也姉御ともいふ、式に愛知郡火上姉子神社あり、此媛を祭ると云り、

〔老牛餘喘初編下〕姉子

延喜神名式に、愛智郡火上姉子神社あり、○中略曾丹集の歌に、神まつる冬はなかばに成にけりあねごが閨に榊をりしきとありと、本居氏の書にみゆ、おのれ又おもふにこれらの姉ごは、今も父ご、母ご、伯父ご伯母ご兄ごといふに同じくて、もとは父き、母き、伯父き、伯母き、兄き、姉き、などいふきの轉りたるなり、俗に子、或は御とかくは借字なり、猶中の卷なる伯耆の條を合せ見るべし、

〔源氏物語四十七角總〕例の中納言殿おはしますとて、けいめいしあへり、君だちなまわづらはしくき給へど、うつろふ方ことにほはし置てしかばと、ひめ君はおぼす、中君は思ふかたことなめりしかば、さりともと思ながら、心うかりし後は、ありしやうにあね君をもおもひきこえ給はず、心おかれてものし給ふ、

〔撈海一得上〕今三都ニ、女ノ多集リタル處ニテ、諸女義ヲ結テ、兄弟ブンナド云事、唐ノ崔令欽ガ敎坊記ニ曰、敎坊中ノ諸女、以二氣類相似一、約爲二香火兄弟一、ト言ハ、香火ヲ備テ鬼神ニ誓ユヘニカク云ニヤ、此事由テ來ル事舊シ、漢書外戚傳曰、房與レ宮對食、注應劭曰、宮人自相與爲二夫婦一、名二對食一、房宮二人之名也ト、角先生蠟師父何人カ俑作レルヤ、